

2021年ラウンド3レース8 澤龍之介がトップチェッカーを受けるもペナルティを科され 三浦愛が念願のFRJ初優勝を飾る

Formula Regional Japanese Championship(フォーミュラ・リージョナル・ジャパニーズ・チャンピオンシップ) 2021のラウンド3 レース8 決勝が9月25日に富士スピードウェイで行われ、8号車の三浦愛選手(ARTA F111/3)が初優勝を飾りました。



レース7 決勝から約2時間30分のインターバルを経て始まったレース8。レース7に引き続きポールポジションは28号車の古谷悠河(TOM'S YOUTH)選手でしたが、スタートで出遅れ3番手に後退。代わって77号車、澤龍之介選手(D'station Racing F111/3)がトップに浮上し、2番手には三浦選手が続きました。

古谷選手は3周目に三浦選手を追い抜き、2番手に戻ると、そのままトップの澤選手に接近。6周目のTGRコーナーでインに飛び込みますが、ブレーキングで行き過ぎてしまいポジションアップには繋がりませんでした。その後も2台のバトルが続きましたが、古谷選手は7周目のTGRコーナーで澤選手の攻略に成功し、トップに浮上します。しかし、直後のコカ・コーラコーナーで再逆転を狙った澤選手が古谷選手の車両を押すような形で接触してしまい、古谷選手はスピンを喫してコースアウト。6番手まで後退しました。

澤選手も接触の際にコースオフしましたが、後続のマシンに追い抜かれることなくレースを続行。そのまま15周を走りきってトップでチェッカーを受けました。しかし、暫定表彰式の後に、古谷選手との接触が危険なドライブ行為と判定され、レース結果に30秒加算のペナルティを受けることとなりました。

これにより、三浦選手が繰り上がりで1位となりFRJ初優勝を果たしました。2位には3号車の小川颯太選手(Sutekina Racing)、3位には5号車、塩津佑介選手(Sutekina Racing)が入りました。

マスタークラスでは、5番グリッドからスタートした4号車の今田信宏選手（JMS RACING with B-MAX）が、終始安定したペースでトップ集団に食らいついていく走りを披露。最後はアクシデントによる後退から挽回してきた古谷選手に先行され、総合6番手*1でのフィニッシュとなりましたが、同クラスのライバルに対して19.1秒もの大差をつけて、2連勝をマークしました。クラス2位は39号車、田中優暉選手（ASCLAYIndサクセスES）、3位は11号車の植田正幸選手（Rn-sportsF111/3）となりました。

今週末のFRJで最後のレースとなるレース9決勝は9月26日10時35分から行われます。

◆レース8 優勝 三浦愛選手コメント

「今の心境としては複雑ですが、自分にとってFRJで優勝するのは初めてなので、こういう形ではありますけど、後で振り返った時に、この優勝は大きなものになると思うので、嬉しい気持ちはあります。いつもだと、レース中に『前のマシンに何か起きないかな』とか余計なことを考えてしまうんですけど、今回は全くそうじゃなくて、澤選手と古谷選手に食らいついてバトルができていたので、そういう邪念がなかったのが良かったのかなと思います。課題となっている序盤のペースについても、まだ足りない部分はありますが、岡山大会やもてぎ大会と比べると、かなり良くなってきました。シリーズのチャンピオン争いを考えると古谷選手とのポイントを詰められたのは良かったです。この勢いで明日のレースも頑張りたいです」

◆レース8 マスタークラス優勝 今田信宏選手コメント

「全周にわたってプッシュし続けて、最初から最後までペースが落ちなかったです。満足のいくレースでした。佐々木大樹選手が僕のコーチとしてついてくれているんですけど、今はすごく細かいところまで指摘し、教えてもらえないながらやっているの、それが今回の走りに活きたと思います。いつも上位争いをしている若手のドライバーたちに絡めるレースができるところまでいけばなと思っていました。彼らを追い抜くところまではいきませんでした、それに近いところまでは行けたと思います。明日はクラス5番手スタートで厳しいレースになるかもしれませんが、少しでも食らいつけるように頑張ります」

以 上

*1: 正式結果は総合5位